

ラフカディオ・ハーンが捉えた日本の「根源」

丸山敏秋（倫理研究所理事長）

「日本は蹉跌するであろうか？その予見ははなはだしく困難である。けれども、たとえ将来に不幸が見舞っても、それはこの国の国民の気概が弱くなった結果ではあるまい。おそらくそれは政治上の誤謬、あるいは、あまりに向う見ずな自信のまねいた結果として起ったことと見る方が、よきそうである」

（ラフカディオ・ハーン「柔術」）

はじめに

カール・マルクスの『資本論』第一部が初めて刊行されたのは1867年、フリードリッヒ・ニーチェが世を去ったのは1900年、同年にジグムント・フロイトの『夢判断』が刊行された。三者は共に、20世紀の思想にもっとも影響を与えた人たちである。

しかしマルクスの科学的社会主義の未来予測は大きくはずれた。フロイトの精神分析学はすでに古典的とされ、擬科学の域にとどまっている。筆者が学生の頃には日本で人気の高かったニーチェの著作も、今ではほとんど読まれなくなった。けれどもニーチェによるニヒリズム到来の「予見」は、恐ろしいまでに当たっている。たとえば彼独特のアフォリズム（箴言）が伝える次のような一文がある。

道徳的価値評価の結果としてのニヒリズム的な帰結（無価値性への信仰）。——利己的なものが私たちには厭わしくなっている（非利己的なものは不可能であるとの洞察ののちにおいてすら）、——必然的なものが私たちには厭わしくなっている（自由選択や「可想的自由」は不可能であるとの洞察ののちにおいてすら）。私たちには、私たちが私たちの諸価値を置き入れておいた領域に到達していないということがわかっている——かくして、私たちがそのうちで生きながらえている他の領域は、いまだにいちどとして価値ありとされたことがない。反対に、私たちは疲れている、というのは、私たちが主要な衝動を失ってしまったからである。「これまでのところは徒勞！」

百年も前にニーチェは、現代社会を蝕んでいる精神の傾向性を見事に洞察しているのではないか。ニヒリズムの克服なくして、人類は次代の文明を輝かせることはできないであろう。だがそもそもニヒリズムはニーチェが言うように、人々を頹廢デカダンスに引き込むだけでなく、それを乗り越えることによって旧弊を一新し、新たな時代を切りひらく可能性を秘めている。たとえば卑近なことでは、日本の場合、明治以降（とくに戦後になって）金科玉条とされてきた民主主義あるいは個人主義の諸価値（人権・自由・平等など）に対して、ニヒルなまなざしでその正当性や妥当性を見つめ直すことは有益であろう。

そしてニヒリズムには、深い思想を伴う実践的な課題を導き出す力がある。ニーチェの場合は「生の哲学」に裏付けられたきわめて行動的な「超人」思想を打ち出し、ニヒリズムを克服しようとした。斬新にして独創的なニーチェの思想は、ヨーロッパ精神の「根源」ルーツをなす古代ギリシアやローマの古典文献学研究が下敷きになっていることを注視したい。「根源」への志向なくして、真にオリジナルな見解や思想は生まれまいであろう。

第1次大戦後のヨーロッパ社会に蔓延したニヒリズムが、成熟社会になったといわれる先進諸国で息を吹き返し、再び広がりつつある。日本もその例外ではない。ニヒリズムを克服して新たな文明を創造するためには、一方では新しい普遍的な人類文明の探求と共に、他方では各民族がそれぞれ固有の精神文化をその「根源」から捉え直すことが求められているのではないか。

すでに19世紀において、日本人の独自性や日本の精神文化の本質に、鋭い視線を投げかけた先達があった。ニーチェよりも6歳年下で、4年多く生きた、ほぼ同時代人のラフカディオ・ハーン（小泉八雲、1850～1904）である。両者はまったくタイプを異にしているが、どちらも並外れた想像力と予見力の持ち主であった。ハーンは日本で約14年間生活し、日本人女性と結婚し、日本に帰化して東京で没する。近代化を遂げていく日本を横目に、埋もれようとしていた「旧き良き日本」を再話という方法で文学にとどめ、数多くの批評作品を残した。彼のまなざしは常に日本の「根源」に向けられていたのである。出雲大社に外国人として初めて昇殿参拝を許されたラフカディオ・ハーンの日本観の土台になったものは何か。そこからわれわれは何を汲み取れるであろうか。